

日清戦争				
出版社	頁	項目名	記述	コメント
大阪書籍	156～ 157	日清戦争	<p>日本と日朝修好条規を結んだ朝鮮政府は、その後、開化政策(注1)へと転換していきました。しかし、開化政策に反対する勢力も強く、さらに日本と清が政治に干渉したこともあって、朝鮮国内は不安定でした。そのうえ、朝鮮政府が、財政赤字を補うために税を重くしたので、民衆の反発が強まりました。</p> <p>1894(明治27)年、東学(注2)を信じる人々が農民と結び、外国勢力の追放と政治改革をめざして兵をあげました(甲午農民戦争)。朝鮮政府が清に出兵を求めると、戦争の準備を進めていた日本も、清との条約を理由に朝鮮に出兵(注3)し、日清戦争が始まりました。戦争は、近代的な軍隊を整えた日本の勝利に終わり、翌年、下関(山口県)で講和会議が開かれました。</p> <p>(注1)日本の明治維新にならって、近代化を進め、外国の支配に服さない自衛力のある近代国家をめざしました。 (注2)朝鮮の民間信仰をもとにした宗教団体で、西学(キリスト教)に反対しました。 (注3)日清両国は、朝鮮に出兵する場合、事前に通知し合うことなどを取り決めた条約(天津条約)を、1885年に結んでいました。</p>	<p>朝鮮政府の開化政策をまとめているが、開化政策の内容が、欧米諸国とも条約を結ぶとともに、西洋の技術・制度を導入にして内政の改革を進めようとしたものであったことを考えると、(注1)のような記述は問題である。</p> <p>甲午農民戦争から日清両国の出兵までの流れはよくわかるが、その後日清戦争が勃発するに至る点については、本文では明確ではない。</p> <p>【総論】参照。</p>
	157	下関条約と三国干渉	<p>講和会議で結ばれた下関条約では、清は、朝鮮の独立を認めること、遼東半島・台湾などを日本にゆずること、巨額の賠償金を支払うこと、欧米と結んでいた不平等条約を日本とも結ぶことなどが決められました。そして、台湾を獲得した日本は、台湾住民の抵抗を武力でおさえ、軍人を総督とする台湾総督府をおき、植民地として支配しました。</p> <p>日本の大陸への影響力の拡大に対して、アジア進出をめざすロシアは、ドイツやフランスと結び、遼東半島の清への返還を日本に強く要求しました。これを三国干渉といいます。日本は、遼東半島を清に返し、その還付金を得ることでこの要求を受け入れました。その後日本は、清から得た賠償金などで、ロシアの南下にそなえて軍備を強化していきました。</p>	
教育出版	127	日清の対立と朝鮮	<p>朝鮮に勢力を広げようとした日本は、朝鮮への支配を強めようとする清と対立を深めました。朝鮮は、日本をけん制しようとする清のすすめで、欧米諸国とも外交関係を結びました。朝鮮でも近代化の努力がはじまりましたが、日本と清の干渉によって、十分な成果があげられませんでした。そのようななか、朝鮮では政治の腐敗がすすみ、人々の生活は苦しくなっていました。</p> <p>1894年、朝鮮の南部で、東学(注)という宗教を信仰する農民らが、政治の改革をもとめるとともに、日本人や欧米人を追い出すために立ち上がりました(甲午農民戦争)。</p> <p>(注)民間の信仰をもとに、儒教や仏教などをとり入れた宗教。西学(キリスト教)に反対しました。</p>	<p>章タイトルが「朝鮮をめぐる戦い」となっているにもかかわらず、どのような点で具体的に日清が対立したのかについて言及されていない。</p> <p>甲午農民戦争がどのように日清戦争につながるのか、また、下関条約でなぜ日本が清国に朝鮮の独立を認めさせたのかについても言及する必要がある。</p> <p>【総論】参照。</p>
	127	日清戦争と下関条約	<p>朝鮮政府が清に援軍の派遣を求めると、日本はこれに対抗して出兵し、1894年、日清戦争がはじまりました。戦争は、日本の勝利に終わりました。1895年、下関で講和条約(下関条約)が結ばれ、清は日本に、朝鮮の独立、遼東半島・台湾・澎湖諸島の譲渡、賠償金約2億両(当時の日本円で約3億円)の支払いを認めました。</p> <p>日清戦争に勝利した結果、東アジアでの日本の勢いは大きくなり、日本人のなかには、中国や朝鮮に対して優越感や差別意識をもつ人もいました。</p>	

清水書院	166	日清戦争	<p>19世紀から20世紀へとかわるころ、日本は、政治・経済・教育などさまざまな面で国力がめざましく発展した。おなじころロシアもシベリア鉄道に着工して、東アジアへの関心を深めた。その結果、日本にとって朝鮮問題が重要となった。</p> <p>朝鮮では、1894年、東学(注)を信じる農民が大反乱をおこした。朝鮮政府は清に援軍を求めたが、日本もこれを知って軍隊をおくった。農民たちは政府と和解したが、日本政府はしりぞかず、朝鮮政府には改革を要求し、清国軍とは戦争をはじめた。</p> <p>この日清戦争は世界の予想をうらぎって日本が勝利をおさめた。清は翌年、日本に対し、①朝鮮の独立をみとめ、②遼東半島・台湾などをゆずり、③巨額の賠償金を払うことなどを約束した(下関条約)。これに対し、東北アジアへの進出をくわだてていたロシアは、フランスやドイツとともに、遼東半島を清に返すよう日本にせまり、日本はやむなくこれを受け入れた(三国干渉)。</p> <p>(注)西学(欧米文化)のひろまりに反発して急速にもり上がった朝鮮の民族的宗教を東学といった。</p>	<p>日清戦争以前から、ロシアとの対抗関係が東アジアにおける最大の矛盾点であったと読めるような記述は果たして妥当か。</p> <p>甲午農民戦争に対する日本軍の干渉が日清戦争を引き起こすきっかけとなったことを説明した記述は、朝鮮における政治変動がなぜ日清間の戦争をもたらすのかという点を理解させることができるという点で評価できる。その一方、「甲午農民戦争」という歴史的名辞を使用せず、またなぜ下関条約で日本が清国に朝鮮の独立を認めさせたのかという点については言及がなされていない。</p> <p>【総論】参照。</p>
帝国書院	170	朝鮮をめぐる東アジアの情勢	<p>日本も欧米諸国のやり方をまねて、朝鮮半島に勢力をのぼそうと考へ、江華島事件以後、朝鮮出兵の機会をねらっていました。そのため、朝鮮を勢力範囲と考へていた清と、対立するようになりました。</p> <p>そのころ朝鮮では、重い税金に加え、凶作と朝鮮開港後に進出した日本の商人による米の買いしめで、米の値上がりが続いていました。そうしたなか、1894(明治27)年、西洋文化(西学)に反対する宗教(東学)を信仰する農民たちを中心に、日本と欧米諸国を追いはらい、朝鮮の政治改革をめざす反乱がおきました。農民軍は、政府軍を破って朝鮮南部に勢力を広げました(甲午農民戦争)。</p>	<p>開国後の朝鮮経済への言及、甲午農民戦争の経過などについて言及している点は評価できる。また、甲午農民戦争から日清戦争の勃発までの経過が簡潔にまとめられている。</p> <p>一方、なぜ下関条約で日本が清国に朝鮮の独立を認めさせたのかという点について言及する必要があるのではないか。</p> <p>【総論】参照。</p>
	171	日清戦争	<p>朝鮮政府は、農民軍をおさえられなくなり、清に援軍を求めました。日本は清に対抗し、すぐに朝鮮へ軍隊をおくりました。農民軍と朝鮮政府は休戦しましたが、日本は朝鮮王宮を占拠するなどの内政干渉を行い、清との対立を深めました。そして1894年7月、豊島沖の衝突をきっかけに日清戦争がはじまりました。……</p> <p>そして、1895年4月、下関(山口県)で講和条約(下関条約)が結ばれました。その結果、清は朝鮮の独立を認め、日本は、遼東半島・台湾などととも、2億両(当時の日本の国家予算の3.6倍)の賠償金を得ました。この賠償金は、軍事力の強化に使われるとともに、日本の工業化の基金ともなりました。</p>	
東京書籍	156	日清戦争	<p>朝鮮では、日清両国の対立のなかで、政治や経済が混乱したため、1894年、民間信仰をもとにした宗教(東学)を信仰する団体を中心とした農民が、腐敗した役人の追放や外国人の排斥をめざして、朝鮮南部一帯で蜂起しました(甲午農民戦争)。</p> <p>これを機に、清と日本は朝鮮に出兵し、8月に日清戦争が始まりました。戦いは優勢な軍事力を持つ日本の勝利となり、1895(明治28)年4月、下関条約が結ばれました。この条約では清が、(1)朝鮮の独立を認め、(2)遼東半島・台湾・澎湖諸島を日本にゆずりわたり、(3)賠償金2億両(当時の日本円で約3億1000万円)を支払うことなどが決められました。</p>	<p>日清の対立と朝鮮の政治・経済の混乱が明確に因果関係でとらえられているが、それを主要要因とするだけの根拠は何か。</p> <p>なぜ甲午農民戦争が日清戦争の勃発につながるのかについての説明が不十分であり、またなぜ下関条約で日本が清国に朝鮮の独立を認めさせたのかという点についても言及する必要があるのではないか。</p> <p>【総論】参照。</p>

日本書籍 新社	158-159	朝鮮をめぐる 対立	<p>日本は朝鮮に不平等条約をおしつけたのち、有利な条件を生かしてしだいに朝鮮に勢力をのばしていった。これに対し、朝鮮では反発が強まった。日本は朝鮮の宮廷のなかの対立を利用して、日本にたよろうとする勢力と手を結び、清の勢力をのぞこうとしたが失敗し、清との対立を深めた。</p> <p>1894年、朝鮮では、日本や欧米諸国の進出と朝鮮政府に対する不満が爆発し、東学(注)を信仰する農民が中心になって反乱をおこした(甲午農民戦争)。農民軍は、外国勢力の追い出しと政治の改革を求め、各地で政府軍をやぶった。これをおさえるため、朝鮮政府が清国に助けを求めると、前から清との戦争の準備をしていた日本はただちに朝鮮へ出兵した。</p> <p>(注)1860年代に生まれた宗教の一種で、キリスト教(西学)に対抗し、人間の平等をとなえた。朝鮮政府の弾圧にもかかわらず、農民の間に広まった。</p>	<p>急進開化派の位置づけを「日本にたよろうとする勢力」とまとめてしまうのは、急進開化派の持つ近代化構想を正確に位置づけたものではなく、朝鮮の主体性を軽視した見解である。また朝鮮政府ではなく、「朝鮮の宮廷」と記述しているのは何を意図したものであろうか。</p> <p>日清開戦過程については、朝鮮側に内政改革案を突きつけた点、日本軍による朝鮮王宮の占領など、具体的史実から日本の姿勢を理解することができ、評価できる。一方で、なぜ下関条約で日本が清国に朝鮮の独立を認めさせたのかについて言及する必要はないのであろうか。</p> <p>【総論】参照。 一方、閔妃殺害事件に触れるなど、日清戦争後の日朝関係にも言及しており、この点は他の教科書には見られない特色となっている。</p>
	159	日清戦争	<p>日清両国が出兵したとき、すでに農民軍と朝鮮政府は休戦していた。しかし、日本は軍隊を駐在させつつけるため、改革案を朝鮮政府におしつけ、これに対する回答を不満として、朝鮮の王宮を占領した。そして、清の海軍を攻撃したのち、宣戦を布告して日清戦争をはじめた。</p> <p>戦争は8か月ほどで日本の勝利に終わり、1895年、下関で講和条約が結ばれた。この下関条約で、清は朝鮮の独立を認め、日本に遼東半島と台湾をゆずり、多額の賠償金を支払うことになった。しかし、満州(中国東北部)に進出しようとしていたロシアは、フランス・ドイツとともに、遼東半島を清に返すよう日本に要求し、日本はこれを受け入れた(三国干渉)。</p> <p>日清戦争後、日本の領土とされた台湾では、独立運動がおこったが、日本は軍隊を派遣してこれを弾圧し、台湾を植民地として支配した。朝鮮では、日本公使らが朝鮮の王妃(注)を暗殺したが、日本よりの政権をつくることには失敗した。</p> <p>(注)閔妃(1851～95)朝鮮国王のきさき。しばしば政治の実権をにぎった。【写真】</p>	
日本文教 出版	136	朝鮮をめぐる 対立	<p>左上の図は、イギリスの新聞が、1910年に発表した「王国の国勢比較図」である。中央が力を誇示するイギリス。左下が幼い皇帝の中国。中国とロシアにはさまれた朝鮮。右上の日本は、ドイツやオーストリアなどとともに、列強の一員に位置づけられている。大小に描かれる王室の肖像と、人口や領土を示す円の大きさから、この時代の国力を知ることができる。</p> <p>日本は、明治維新以来、アジアの大国になることをめざし、朝鮮を開国させ、朝鮮の支配をめぐり、清と対立した。</p> <p>朝鮮では、近代化をめぐり、王室内で、清国派と日本派が対立していて、政治が混乱し、農民は重税に苦しんでいた。</p>	<p>【コラム】では、「朝鮮をめぐる対立」と銘打ちながらも、日本が列強の有力な一員であったことが記述の中心となっており、タイトルと本文が整合的な内容となっていない。また開化派を「清国派」と「日本派」と言及し、その主体性を認めないかのような表現は問題であろう。また「甲午農民戦争」という歴史的名辞を使っていない。</p> <p>日本の出兵動機については「朝鮮での指導権をとるため」と書かれているので、日清戦争勃発の原因については類推できる。その一方で、なぜ下関条約で日本が清国に朝鮮の独立を認めさせたのかについて言及する必要があるのではないか。</p> <p>【総論】参照。</p>
	137	戦争の開始	<p>1894年、朝鮮では、開国のもたらした生活不安から、外国勢力を追放し、政治改革を求める農民が蜂起した。朝鮮政府はこれを鎮圧するため、清に援軍を求めた。日本は、朝鮮での指導権をとるために出兵し、8月、日清戦争がはじまった。朝鮮が主戦場となり、日本はリヤオトン(遼東)半島を占領し、清の艦隊を破り、1895年、下関で、講和条約(下関条約)が結ばれた。</p> <p>内容は、清が、朝鮮の独立を認め、2億両(3億1000余万円)の賠償金を日本に払い、リヤオトン半島・台湾・ポンフー(澎湖)諸島を日本にゆずるなどであった。翌年、通商条約を結び、大陸進出の足がかりとした。</p>	

扶桑社	163	【コラム】朝鮮半島と日本	<p>●日本の独立と朝鮮半島</p> <p>東アジアの地図を見てみよう。日本はユーラシア大陸から少しはなれていて、海に浮かぶ島国である。この日本に向けて大陸から一本の腕のように朝鮮半島が突き出ている。両国のこの地理的な関係は、長い歴史のうえで重要な意味を持ってきた。</p> <p>古来、朝鮮半島からは、中国などの進んだ文明が日本に伝えられた。しかし同時に、朝鮮半島に日本の安全をおびやかす勢力がおよんだこともあった。日本は、中国と朝鮮半島の動向に注意を払わねばならなかった。日本が古代律令国家を形成したのも、東アジアの中で自立することをめざしたものであった。</p> <p>鎌倉時代に、元寇の拠点となったのも朝鮮半島だった。反対に、豊臣秀吉が朝鮮半島に大軍を送ったこともあった。江戸時代には、対馬藩を通して徳川幕府と朝鮮との良好な関係が続いた。</p> <p>●朝鮮の近代化と日本</p> <p>明治新政府は、政権樹立後、すぐに朝鮮と国交を結ぼうとした。しかし、中国の清朝に朝貢していた朝鮮は、外交関係を結ぶことを拒絶した。朝鮮を開国させた1876(明治9)年の日朝修好条規は、その第一条で、「朝鮮国は自主の国」であるとうたった。これは、清朝の影響から朝鮮を切りはなすねらいがあった。</p> <p>清朝以上におそろしい大国は、不凍港を求めて東アジアに目を向けはじめたロシアだった。ロシアは1891年にシベリア鉄道の建設に着手し、その脅威はひたひたとせまってきた。朝鮮半島が東方に領土を拡大しつつあるロシアの支配下に入れば、日本を攻撃する格好の基地となり、島国の日本は、自国の防衛が困難になると考えられた。</p> <p>そこで日本は、朝鮮の開国後、近代化を始めた朝鮮に対して軍政改革を援助した。朝鮮からも視察団がやってきて、明治維新の成果を学ぼうとした。朝鮮が他国におかされない国になることは、日本の安全保障にとっても重要だった。</p> <p>●朝鮮をめぐる日清の対立</p> <p>いっぽう、清は、東アジアの情勢を別の見方でとらえていた。1879年、長いあいだ、清にも朝貢してきた琉球が沖縄県となり、日本の領土に組みこまれたことは、清朝にとって大きな衝撃だった。その後、清仏戦争に敗れて、もう一つの朝貢国ベトナムがフランスの支配下に入った。朝貢国が次々と消滅していくことは皇帝の徳の衰退を意味し、中国を中心とする東アジアの秩序が崩壊する危機を示すものだった。</p> <p>そこで清は、最後の有力な朝貢国である朝鮮だけは失うまいとし、日本を敵とみなすようになった。日本が日清・日露の二つの戦争を戦うことになる背景には、このような東アジアの国際関係があった。</p>	<p>【コラム】中、「ロシアは1891年にシベリア鉄道の建設に着手し……自国の防衛が困難になると考えられた」との記述は、具体的には1890年12月の首相山県有朋の施政方針演説を指すものと思われるが、「日本は、朝鮮の開国後、近代化を始めた朝鮮に対して軍政改革を援助した。朝鮮からも視察団がやってきて、明治維新の成果を学ぼうとした」との記述は、1880年代を中心にした動きであり、因果関係が正確ではない。そして何よりも、「近代化を始めた朝鮮に対して軍政改革を援助した」とするが、日本人軍事教官を招聘して創設された朝鮮の新式軍隊である「別技軍」は小規模なものであり、「朝鮮が他国におかされない国になることは、日本の安全保障にとっても重要だった」とするような意図をもって日本が朝鮮に臨んだとはいえないであろう。そのような対朝鮮政策が、1880年代において日本政府内で立案・実施されたという証拠を提示する必要がある。また、清国が、かつての「朝貢国」が消滅するなかで、「最後の有力な朝貢国である朝鮮だけは失うまいとし、日本を敵とみなすようになった」と断定しているが、当時の清朝にそのような外交方針が存在していたことを示す必要がある。これは意見と事実を混同した記述ではないだろうか。前者の事例とあわせ、朝鮮を日清関係の単なる客体としてのみとらえ、独自の政治的・外交的主体性を朝鮮に一貫して認めようとしない評価には大いに問題がある。</p> <p>また、日清両国の朝鮮への派兵がなぜ日清戦争につながるのかという点、下関条約でなぜ日本が清国に朝鮮の独立を認めさせたのかという点についても言及する必要があるのではないかと。</p> <p>【総論】参照。</p>
	164	朝鮮をめぐる日清の抗争	<p>日本は、朝鮮の開国後、その近代化を助けるべく軍隊の制度の改革を援助した。ところが1882(明治15)年、改革に取り残され、冷遇されたことに不満をもった一部の朝鮮軍人の暴動が発生した(壬午事変)。清はこれに乗じ、数千の軍隊を派遣してただちに暴動を鎮圧し、日本の影響力を弱めた。</p> <p>1884年には、日本の明治維新にならって近代化を進めようとした金玉均らのクーデターがおこったが、このときも清の軍隊は、これを弾圧した(甲申事変)。</p> <p>朝鮮における清朝との勢力争いに2度敗北した日本は、清との戦争を予想して急速に軍備を拡張し、やがてほぼ対等な軍事力をたくわえるにいたった。</p>	

164	日清戦争と日本の勝因	<p>1894(明治27)年、朝鮮の南部に甲午農民戦争とよばれる暴動が起こった。農民軍は、外国人と腐敗した役人を追放しようとし、一時は朝鮮半島の一部を制圧するほどであった。わずかな兵力しかもたない朝鮮王朝は、清に鎮圧のための出兵を求めたが、日本も清との申し合わせを口実に軍隊を派遣し(注)、日清両軍が衝突して日清戦争が始まった。</p> <p>(注)1885(明治18)年、日清両国が朝鮮に出兵するさいには事前に通知し合うという条約が両国間に結ばれていた。</p>
165	下関条約と三国干渉	<p>戦場は朝鮮のほか、満州(中国東北部)南部などに広がり、日本は陸戦でも開戦でも清を圧倒し、勝利した。</p>